



誘惑カフェ

叔母・人妻・女子高生たちと蜜色パ仆

大泉りか

挿絵／貂

立ち読み版



第一章	憧れの叔母の痴的筆おろし	4
第二章	年上美脚OLの絶品足コキ	97
第三章	セレブ妻の淫らな誘惑	149
第四章	清纯派女子高生のロストバージンは制服のまま	212
第五章	大好きな叔母と、そのアヌス処女は僕のもの	252

登場人物

Characters

内田 真治

(うちだ しんじ)

二十歳の大学二年生。女性と付き合った経験がない。少し真面目でむっつりスケベな気のある青年。子供の頃から叔母の奈央に憧れている。

大森 奈央

(おおもり なお)

真治の母方の叔母。面倒見のいい性格。童顔やポニーテールが若々しい二十七歳。150センチの身長ながらゆさゆさ揺れるほどの豊乳。自分の店を開く夢を叶える。

柏木 莉乃

(かしわぎりの)

お嬢様の多い名門女子校に通う高校生。奈央の店でバイトしている。明るく好奇心旺盛で人懐っこい性格。スタイルもすらりとスリムで抜群。三つ編みがトレードマーク。

市川 美沙子

(いちかわ みさこ)

奈央の店で働く三十代半ばのパート主婦。仕事も身に着ける物も上品で人当たりもよいセレブ。柔らかく豊満なバストを持つが、夫がEDのため性欲を持って余している。

水元 宏美

(みずもと ひろみ)

奈央の店の常連客である三十路OL。ポブカットに隙のない化粧、洗練された服装で、なんともいえない色気を醸し出しているキャリアウーマン。はきはきとした性格。



第三章 セレブ妻の淫らな誘惑

1

「奈央ちゃん、三番テーブルのドリンク、アイスコーヒーじゃなくってジンジャーエールだよ。それに四番はロコモコセットじゃなくってパンケーキ単品。ほら、伝票にもちゃんと書いてある」

「えっ、あらヤダ。わたしってば。真ちゃんごめん。今すぐに作り直すから。美沙子さん、ドリンクのほうお願い。わたし、パンケーキ焼くから」

オーブンしてふた月が過ぎようとしていた。店は相変わらず盛況……と言いたところだが、オーブン当初の賑わいはなりを潜め、宏美を始めとする常連客もついているが、まあポチポチ……というところに落ち着いている。

今日もランチで出たのは、おそらく二十食いかないくらいだろうか。休日で近所の会社が休みだから仕方のない部分があるかもしれないが、オーブン当時の半分くらいに落ち着いてしまっている。

しかし、本格的に梫子ていこ入れするには、どこをどうすればいいのかもわからず、もう

少し様子を見てみよう、と奈央とは話し合っていた。

むしろ、それよりも心配なのは、奈央のほうだった。どうしたものか、最近は何ミスを頻発している。今日だってこのぎまだ。

「はい、これ三番のジンジャーエール」

パートの美沙子さんがカウンターの内側からジンジャーエールの注がれたグラスを差し出した。生姜やレモン、シナモンスティックなんかを混ぜて作るジンジャーシロップを炭酸で割ったもので、これを知ってから市販のものはべたっと甘すぎて飲む気になれない。

三番テーブルにジンジャーエールを配膳して再びカウンターに戻り、ランチの伝票をチェックしていると、美沙子がすつと近寄ってきた。

チェックのシャツに太ももが丸出しになるデニムのショートパンツにエプロン。奈央の趣味で選んだ制服だから仕方がないが、美沙子が着るには、少し若作りだ。しかし、故に普段のセレブっぽい上品な格好とのギャップが妙にいやらしく、いまだに見る度にドキドキしてしまう。

「ね。オーナーってば、今日はまた、一段と元気ないわよね」

「そう……ですわね。まあ、ここんところ、ずっとあんな感じですけど」

「あのね、別れたんだって」

「えっ……誰とですか？」

思わず声を上げると、美沙子は真治の唇に人差し指を当てて、「しっ」と小声で注意した。

「決まってるじゃない。彼氏さんとよ。同棲も解消して、近々、引っ越すらしいわよ」
「えっ……そうなんですか!？」

まさに寝耳に水だ。真治と二人で会う時は、妙にはしゃいだ様子なのが気になってはいた。が、以前はよく言っていた同棲相手の愚痴を、最近はむしろ言わなくなったので、上手くいっているのだと勝手に思い込んでいた。

(別れただなんて……結婚するって言ってたのに、いったい何が原因だったんだろう)
奈央の気持ちを想像し、沈んだ気分になっていると、美沙子が真治の背後に身体を寄せて、その肩を手できゅっと掴んだ。

「こら、真治くんまで、なんで元氣失くしてるのよ。ほら、元氣だせえっ！」
「あつ、はいっ……あの……うあうっ……ちよっ、美沙子さん、身体が……」

元氣づけようとしてくれるのは嬉しい。が、なんせその身体の位置が近すぎる。背中にぼわぼわと柔らかいものが当たり、おまけに耳たぶには温かく湿った息が吹きか

かるのだからたまらない。

「なあに。あら、真治くんってばずいぶんと凝ってるのね。若いくせにどうしちゃったの」

「いや、あの……や、やめてください、営業中なんですからっ」

『いい家の奥様』という雰囲気的美沙子に、最初は気後れしていたが、話してみれば美沙子は気さくで、すぐに打ち解けることができた。それは嬉しいのだが、なんだかんだとこうして構ってくるのには、困ってしまう。

「だって、なんだか息子みたいな気がしちゃうのよ」

というのが美沙子の弁だが、真治にしてみれば、美しい美沙子のことを、母親のような目で見ることもなんて到底できない。

「美沙子さーん、真治さん。奈央さんが順番にお昼をとってくださいって」

と、厨房の中から莉乃が顔を出した。

「わたしはいいわ。もうあと一時間であがりだし、ダイエットしてるの」

美沙子が時計をちらりと見ると、首を横に振った。真治も釣られて時計を見ると昼の二時を過ぎようとしている。どうりでお腹が減っているはずだ。

「莉乃ちゃん、先に食べちゃっていいよ」

「じゃ、お言葉に甘えちゃいまーすっ！」

さつき奈央が焼き始めたホットケーキが、もうそろそろ焼きあがることだろう。それだけ配膳してしまおうと思って言うのと、莉乃は顔の両脇に下がったおさげをびよんと跳ねさせてぺこりとお辞儀をした。

「わー、お腹がぺこぺこだあ」

厨房の奥に一旦ひっこんだ莉乃が、ロコモコの入った丼と付け合わせのポテトサラダ、それに水の入ったグラスの載ったトレイを手に出てきて、カウンターを回り込んで椅子に腰を降ろした。

その姿を自然と目で追っていることに気が付き、慌てて視線を逸らした。

莉乃も美沙子や奈央と同じチェックのシャツにデニムのショートパンツという制服姿だが、エプロンは掛けておらず、代わりにちらりとお腹が覗くくらいの長さに裾をめぐり上げて、結んでいる。

最初、莉乃はそうやって着ることを、恥ずかしがったのだが「絶対にこっちのほうが可愛いから！」という奈央の勧めを断りきれず、結局従うことになったのだ。が、奈央の見立ては正しく、ぺたんこのお腹が見え隠れする莉乃の着こなしは、トレードマークの三つ編みと相俟って本当に愛らしく、油断するとふと視線が向いてしまう。

「あら、珍しい、今日はロコモコなのね。久しぶりね」

美沙子が莉乃の前の丼の中を見て少し驚いたふうに言った。

『カフルイ』のメインはロコモコ丼だが、賄いとして出されるのは、その日のスペシャルメニューや、余った食材で作られる別の品であることがほとんどで、ロコモコが出されるのは久しぶりだ。

「はい。食べて感想を聞かせて欲しいって奈央さんが。ほら、ここんところ、ちょっとお客さんの入りが悪いじゃないですか。それで、味が落ちたんじゃないかって心配してて。でも、味は全然前と変わってないと思うんですね。うん、美味しいっ」

莉乃はハンバーグと米とをスプーンで掬い上げると、ぱくりと頬張った。その愛らしい仕草と、ふっくらとした唇に思わず目を奪われる。

「なんでかしらねえ。ね、真治くん、やっぱりこういうお店って男性は入りにくいのかしら。ほら、最近は女性客ばかりじゃない？ オープン当時は結構男性客もいたけど」

「そうですね。確かに男一人で入るにはちよつとオシャレだけど……でも、男ってハンバーグ好きだし。値段もこらで六百五十円なら、高いわけじゃないですよ。そりゃあ、チェーン店の牛丼には負けるけど……」

美沙子が首を傾げた。頭を捻りながら店内を見回すと、確かに美沙子の言う通り女性客ばかりで、かろうじてカップルの男性が一組いるだけだ。

「ひよっとして、量が少ないんですかね。莉乃にはちょうどいいですけど……」

「確かに。僕、いつもご飯を多めに盛り付けてもらってるかも」

「うーん……でも、コスト的には今でも採算ギリギリだって、店長言ってたわよね。そうなると大盛り無料は厳しいのかなあ。プラス百円とかすればいいのかしら……」

「うーん。七百五十円ならまあ、許容範囲ですかねえ……」

「お待たせつ、パンケーキ焼けたわ」

美沙子とともに呻っていると、奈央が厨房からふつくらと焼けたパンケーキの皿を片手に顔を出した。

「あつ、僕、持っていきます」

奈央からパンケーキの皿を受け取ると、客のもとへと運んだ。配膳を済ませて、再びカウンターへと戻ると、すでに美沙子と奈央は厨房へと戻ったのか、莉乃だけが可愛らしいおちょぼ口にスプーンを運んでいる。莉乃のグラスがほとんど空になっていることに気が付き、カウンターの上のウォーターピッチャーを持ち上げて、水を注ぎ足した。

「あ、ありがとうございます」

「いいえ」

莉乃がスプーンを唇にぴとりと当てて、ぺこりと頭を下げた。その動作に合わせて、シャツをふつくらと押し上げている膨らみがぼよんと揺れる。

(うわっ……)

大人になりかけている少女の『女』の部分を目の当たりにしてドギマギしていると、莉乃は、真治が注いだ水を口に含み、こくんと飲み下した。

「真治さんって、すごく気が回りますよね」

「そ、そんなことないよ、普通だよ」

ほっそりとした喉が微かに震えるのを眩しい思いで盗み見して首を横に振ると、莉乃はスプーンを井の中に置いて、上半身をこちらに振り返ると、大きな眼で真治を見据えて言った。

「いえ、そんなことないです。真治さんは本当に優しいです。いつも、率先して重いものを持ってくれたり、今だって、お昼ご飯の順番、莉乃に譲ってくれてるじゃないですか」

「いや、そんなの当たり前のことだし……」

そんなにべた褒めされることではない。莉乃の言葉に面映ゆさを感じて後頭部ばかりと搔くと、少女は一瞬、下唇を噛んで躊躇った後、再び真治に視線を向けた。

「あの……突然こういう話とか、真治さん、困るかもしれないんですが、莉乃、あんまり同じ年くらいの男の人としゃべったことないんです。中学から女子校に通ってるから」

「そっか、莉乃ちゃん、内部からの持ち上がり生なんだ」

「そうなんです。それで、普段会う男の人っていえば、お父さんか、学校の先生か。あとはここのお客さんと、駅員の人とかお店の店員さんくらいで」

「でもさ、莉乃ちゃん、可愛いから道端で声を掛けられたりしないの？」

莉乃の通うG学園の生徒たちは、近隣の学校の生徒たちの間で『高嶺の花』として扱われているが、それゆえ、どうにかしてお近づきになりたいと願っている男も多い。真治の大学の学生たちの中にも、秋になると莉乃の学校の文化祭の入場チケットが手に入らないか、と騒いでいたものがあったことを覚えている。

もちろん、制服など着ておらずとも、莉乃自身とてつもない可愛さを持っているのだから、休日の繁華街など歩こうものなら次から次へと声を掛けられるのではないだろうか。

「いや、話しかけられることもありますがけど……でも、なんか怖くって」

「え？ 怖い」

「はい。わたし、あんまり男の人と話したことないから、慣れてなくって。で、話してみたいなって気持ちはあるんですけど、いざ話しかけられると、つい緊張しちゃってダメなんです。あと、うち、パパもちよつと怖いっていうか、たまに大きい声とか出すから、それで基本的に男の人が怖いっていうのもあって……」

「そうなんだ……」

「でも、ここでバイトの度に、しょっちゅう真治さんに会うようになって、それで、男の人でも怖くない人がいるんだなって思ったんです。こうやって少しずつ慣れていったら、いつか恋人とかもできるかなって思っ……なので、真治さん。莉乃のおしやべりの練習台になってくださいっ！」

「う、うん。僕でよければ、そりゃあ喜んで」

少しだけ『いつか恋人』という言葉は気になるものの、こんな可愛らしい女子高生の役に立てるならば大歓迎だ。真治が頷くと、莉乃は満面の笑みを浮かべて手を差し出してきた。

「じゃ、握手です！」

「う、うん」

見るからに華奢な少女の手を握ると、温かで柔らかな感触が伝わってきた。

(こんなに小さいんだ……)

奈央と宏美。今まで親しくなった二人の女性と比べて、驚くほどに小さな手のひらに胸の鼓動がさらに速くなった。

2

祝日だったせい、夜はそこそこに忙しかった。

ランチ隊の戦力である美沙子は帰ってしまったので、厨房は奈央一人に任せ、莉乃にはフロアを重点的に頼み、真治はカウンターの中に入ってドリンクとレジとを兼任する形で、なんとかこなすことができた。二十二時を過ぎて莉乃がシフトをあがった後も、まだ忙しさは続いたが、それでもなんとか閉店までやり過ごし、無事に一日を終わらせることができた。

「お腹空いたでしょ。お昼はロコモコだったから、夜は別のものがいいわよね。パスとオムライス、どっちがいいかしら？」

「どっちでもいいよ。奈央ちゃんと一緒に」

「あら、わたしは今日もう疲れたし、明日は定休日だから、適当につまみでも作っ

て飲んじゃおうと思ってるんだけど。真ちゃんもそうしない？」

「あ……うんっ」

奈央が店で飲もうと誘ってきたのは、開店前夜のあの時以来だ。

（やっぱり、啓二さんと別れて、寂しいのかな……）

もちろん、若干の下心もないわけではないのだが、それが叶わないとしても、一人で飲むよりは、誰かと一緒にのほうがいいだろう。奈央の気持ちおもんばかを慮り、ご相伴あずかることを伝えると、奈央は「もちろんよ」と頷いて、厨房へと消えていった。

「お待たせ。余りものばかりだけど」

「うわぁ、美味しそうだ……」

カウンターに座って待っていると、しばらくして奈央が料理の載ったトレイを運んできた。上に載っているのはタコとセロリのマリネや、ポテトサラダ、それにチキンソテー。どれも美味しそうな奈央の手料理だ。

「ね、せっかくだから、あっちのソファに座らない？ そっちのほうがゆっくりできるじゃない？」

真治が頷くと、奈央は奥のソファ席に食事の載ったトレイを運んで、テーブルに並べると、店の制服のシャツの上に掛けたエプロンを外す。

(奈央ちゃんと初めてエッチした席だ……)

ひよっとして今夜もそういうことになるのだろうか。ほのかな期待に胸をときめかせながら、ソファ席に向かう。

「どうぞ、座って」

「あ、うん……」

しかし、座るようにと促された席は、奈央の正面だった。

(なんだ……隣に座らせてくれないんだ……)

少しがっかりしながらも、奈央と向かいあう形で座った。ショートパンツから覗くむっちりとした太ももにどきりとしつつ、グラスの縁をカチンと合わせると、奈央は一気に飲み干した。

「ちよつ、奈央ちゃん、ペースが早すぎじゃない？」

「いいの、たまには飲ませてよ」

たしなめると、奈央は軽く睨み付けるような視線を真治に向けた。

「仕方ないなあ……」

多少アルコールが入ったほうが、奈央の気も軽くなるに違いないと注ぎ足すと、ま
たも奈央は一気に喉奥へと流し込んだ。ワインの飲み方ではない。心配しながらも、

ふと、昼間、美沙子とした会話を思いだした。ちようど、話すのにいい機会だ。

「そういえば、奈央ちゃんさ、ほら、最近、お客さんがちよつと減つてきたでしょ。あれつて、ひよつとして、ランチのロコモコが男の人にはちよつと少ないせいじゃないかなつて思つて」

「やつぱり少なかった？ 啓二にもそんなこと、言われたことがあつたのよね」

突然、予想していなかった人名が出てきて胸がどくんと飛び上がった。大丈夫なのだろうかと、と奈央の表情を窺うと、ぼんやりとどこかに気がいつてしまったような表情をしている。

「うん……僕の方は、いつも大盛りにしてくれてるでしょ。だから気が付かなかつたんだけど」

「うーん、でも、ランチは今で採算ギリギリなのよね。値段はそのまままで量を増やすのは、ちよつと厳しいかもしれない。でもやつぱり少ないか……ね、なにかいいアイデアはないかしら」

「ううん……」

考えてはみたものの、いいアイデアなどまるで思いつかずに、なんとも重苦しい雰囲気垂れこめてしまった。話題を変えようにも、奈央の心中を考えると話題のチ

ヨイスが難しい。と、その時、入口のドアの上につけたベルが鳴った。

「あれ、誰か来た？」

すでに閉店の看板を出しているのに、誰か間違えて入ってきてしまったのだろうか。訝しみながら、腰を上げて入口を見ると、そこに立っていたのは、美沙子だった。胸元がV字に切れ込んだカットソーにタイトスカート、その上にはトレンチコートを羽織っている。いつも上品でオシャレだが、今日はさらに華がある。

「あれ、美沙子さん!! どうしたんですか、こんな遅くに」

奈央が驚いたように腰を浮かせた。

「うふふ、ごめんね。今日、学生時代の友人たちと食事会があったの。で、帰り道にちよつと通りかかったら、まだ誰かいるみたいだったから」

「そうなんです。真ちゃんと飲んで……もしよかったら、美沙子さんもちよつと飲んでいきませんか？」

奈央はちらりと真治のほうに向けると、なんとなく歯切れの悪い口調で美沙子を誘った。

(あれ……なんか……)

真治に送った奈央の視線に、なんとなく二人で飲んでいたかった、とでもいうよう

な雰囲気を感じて胸がどくんと鳴った。もしかして奈央は、今日、真治を誘うつもりだったのだろうか……。

「あら、いいの？　じゃ、お言葉に甘えちゃおうかしら」

「……ぜひぜひ。ね、真ちゃん、グラス用意してあげて」

しかし、真治たちの関係などまるで存ぜぬ美沙子は、あっさりと奈央の誘いを受けると、トレンチコートを脱いだ。

「はいっ……」

重苦しい雰囲気が解れ、少しほっとしたような、しかし、一方で奈央と二人きりのチャンスを利用してしまったことにながかりかした思いで、真治はワイングラスを用意するために立ち上がった。

「ね、これ。よかつたら次に飲まない？」

真治の隣に座った美沙子も加え、今度は三人で乾杯を済ませると、美沙子が手に持っていた紙袋の中から発泡スチロールのネットで梱包されたワインを取り出した。

「あら、これ、どうしたんですか？」

「同級生でね、フランスに住んでいる友達がいるの。今日の会、その子が一時帰国し

てるっていうんで、会おうって集まりだったんだけど、お土産に貰ったのよ」

「うわあ、嬉しい！」

奈央は大喜びでさっそく梱包を解いているが、しかし、もう夜の零時を回ろうとしている。これからもう一本飲んだら、帰りが相当に遅くなってしまわないだろうか。

「奈央ちゃん、それは今度にしておいたら？」

「いいじゃない。もうそっちのボトルだってちょっとしか残ってないし。これくらい三人いればすぐに飲めるわよ。ね、美沙子さんって飲める口なんですよね」

「ええ。あんまり強くはないけど、お酒は好きよ。まあ主婦だから滅多に飲むこともないけど……」

「じゃ、いっっちゃおう。ね、真ちゃん、そのグラスのワイン、開けちゃって。ぐいーっと」

奈央は自らもグラスを叩くと、ボトルに残っていたワインを自分と真治のグラスに注ぎきった。どうやら今夜はとことん飲むらしい。

「ね、あの話、したの？」

「え、あの話って？」

そんな奈央の荒れた姿を見て心配したのか、美沙子が眉を寄せて真治に耳打ちした。「ほら……今日昼間話した、奈央さんの」

「ああ、してないです。なんだか言いだしにくくって……」

真治に秘密にしていたということは、奈央としては触れられたくないことだったのではないか。そう思うと、真治のほうから尋ねることなどできるはずもなかった。

「ふうん、親戚同士、やたら仲がいいと思っていたけど、意外とよそよそしいのね、君たち」

「そういうわけじゃないですけど……」

「ちよつと、そこ、なんで二人でこそそしゃべってるのよ」

「いや、ごめん……そういうわけじゃないんだけど」

「わたしだけ仲間外れにしちゃって、やーな感じっ」

美沙子と真治とで小声で話し合っていると、奈央が無然とした表情で言った。慌てて誤魔化すと、奈央は拗ねた子供のようによくつと頬を膨らませ、ワインをまた口へと運ぶ。

（奈央ちゃん、これ、相当に酔っ払ってるよな）

心配だが、しかし、叔母がこれで気が晴れるというなら、付き合ってやろうとも思

う。と、美沙子がぼんと手を打って言った。

「そうそう、奈央さん。ごめんね、ちょっと今日、昼間話してたことが話し終えてなかったから、そのこと。ね、それよりも奈央さん、わたしね、いいアイディアを思いついたの。ランチのこと」

「え？ ランチ？」

奈央が繰り返すと、美沙子がこくと頷き、テーブルの上のポテトサラダを指さした。

「そう。あのね、このポテトサラダ。付け合わせにランチのロコモコにいつもつけてるでしょ？ これをね、希望者はコロッケにしたらいいと思うのよ」

「コロッケ!？」

思わず声を上げる真治に、美沙子が力強く頷いた。

「そう。コロッケにすれば、ボリューム感が出て、男性にも満足いくセットになるかなって。それにコスト的にはパン粉と油だけだから、そう嵩むこともないじゃない」

「なるほど……」

到底真治には思いつかなかったアイディアだ。さすがは主婦である美沙子だと感心していると、ぐすつと鼻を吸るような音が耳に入った。

(あれ……奈央ちゃん?)

慌てて頭を上げると、目に入ったのは、耐えるように口をへの字に曲げている奈央の顔だった。ぱっちりりと可愛らしいその目からは、ぼろぼろぽろつと大粒の涙が零れ出ってしまったている。

「奈央ちゃん!? どうしたのっ?」

「やだ、奈央さん。いったいどうして……」

「だって……美沙子さんも真ちゃんも、こんなわたしに優しく……お店が上手いくように必死に考えてくれて……ぐすつ。なんかわたし、人を見る目がなかったって落ち込んでただけ……でも、そうじゃなかったって……」

奈央がしゃくり上げて言った。美沙子と真治とで思わず顔を見合わせていると、奈央はさらに続けた。

「……啓二なんて、悩みを相談しても、『お前が好きで始めたことだろ』って何にも聞いてくれなかったし……ぐすつ……それでもうずっと上手くいかないし……別れようって言ったたら……ものすごく人間性を否定されて……別れたけど……ぐずつ」

こんな乱れた奈央の姿を見るのは初めてだ。

一人で店をオーブンさせる苦勞に加え、本来は頼りにするであろう恋人とも不仲で、

誰にも相談できず、よほどに溜まっていたのだらうと思うと、この目の前の叔母が不憫で仕方がない。

「奈央さん、わかった。わかったから。大変だったのね」

美沙子もまた同じことを思ったのか、ソファからすつと立ち上がると、ソファを回り込んで奈央の隣に腰掛け、その肩に手を掛けた。

「ね、いくらでも泣いていいのよ。わたしの胸を貸すから」

「そんな美沙子さん……ぐずつ……経営者として、そんなの恥ずかし……ぐずつ」

「いいから、いいから。そんなこと気にしないの。わたしよりも年下なんだから、甘えていいのよ。ね、真治くん、お水、持ってきてあげて」

「は、はい……」

さすが大人なだけあり、慰め方も上手く、真治の出番などまるでない。

（美沙子さんが来てくれて……助かったかも……僕一人だったら、あの荒れてる奈央ちゃんに太刀打ちできたか……）

なんとなく打ちひしがれた気分で、キッチンに向かい、ウォーターピッチャーとグラスを持って戻ってくると、奈央は一人でソファにうつぶせていた。

「ごめん、お水いらなかったわ。寝ちゃったみたい。疲れてたのかしらね」

「あ、いえ。でも、よかったです。奈央ちゃん、誰かに吐き出したかっただろうし、僕じゃちよつと相手不足だったかもしれないし」

肩をすくめる美沙子の隣に再び腰を降ろすと、ふうと溜息をついた。

「あら、そんなことないわよ、奈央さん、真治くんのおかげですごく助かってるって言うってたわ」

「そんな僕なんて……」

そうは言っても、恋人と別れたことを相談してもらえなかったのだ。なんとはなしに落ち込んだ気分でいると、美沙子は励ますように真治の肩に手をぼんと置いた。

「ううん、そんなことないわ。真治くんがいるだけで助けになってるのよ」

「でも……」

なんだかおかしな気分だった。

奈央に影響されたのか、はたまた美沙子の母性的なフェロモンにやられたのか、自分の今の気持ちすべて吐き出してしまいたいという欲望に駆られた。いっそ誰にも話していない奈央との関係も含め、すべて告白することができたならどれだけ気持ち軽くなるだろう。そう思う一方で、奈央が言っていないのだから、しゃべってはいけないに違いない、という思いもある。

「どうしたの、君まで急にしゅんとしちゃって」

「いや、なんでもないです……」

この気持ちをどう伝えたらいいのかわからず、唇を噛んで思わず下を向くとふわりと美沙子の腕が肩に被さり、真治をぎゅつと抱き寄せた。

「えっ！」

「いいの、大丈夫よ、力を抜いて」

驚いて顔を上げようとする、美沙子は左手を真治の背中に回したまま、右手を真治の頭にそつと乗せた。囁きとともに、熱い息が耳奥にふーつと吹き込まれて肩から力が抜ける。

「み、美沙子さん……」

「大丈夫……ゆっくりわたしに身体を預けて……」

耳元で繰り返される美沙子の言葉は、まるで子守唄のように心地いい。つい身体を委ねると、頭に置かれた手がさわさわと動いて髪を梳き流した。

（なんだろう……この感じ……）

遠い昔に、これと同じような安心感を持ったことがあるような気がする。記憶にはないが、身体にはうつつすらと残っているこの感触、そう母親に抱かれていた幼子の頃

の――。

「あ……」

気が付くと、カットソーの上から美沙子の乳房に触れていた。いやらしい気持ちなどがあつたわけではなく、ただ無意識にその柔らかな膨らみを手のひらの中に掴んでしまっていたのだ。

「あつ、す、すみませんっ」

慌てて、奈央を起こさないように小声で謝ると、乳房を掴んでいる手を離れた。が、美沙子は、真治の頭を撫でながら、もう片方で真治の右手首を掴むと、自分の乳房の上へと導いた。

「えっ!」

「しっ、奈央さんが起きちゃうから……」

美沙子は真治の唇に人差し指を当てると、耳元で小声で囁いた。そうして、乳房の上の真治の手に自分の手を被せたまま、ゆっくりとその指先に力を入れる。

（美沙子さん、いったい何を……）

戸惑っていると、美沙子は真治の額にこつんと自分の額をぶつけ、誘うような視線を送ってきた。

すぐそばには、奈央が寝ているというのに、どうしたらいいのだろうか。しかし、美沙子の豊かなバストの柔らかな感触は、自分の意志で振りきるには魅力的すぎる。

「ね、直接触って」

「え……でも……」

「わたしみたいなオバサンのおっぱいは、触る気になれない？」

「いや、いいえ……あの、美沙子さんは綺麗だし……その……ただ……」

ソファにうつぶせてすやすやと寝息を立てている奈央にチラリと視線を送ると、美沙子が顔を近づけて、その視界を塞いだ。

（わっ！）

その近さに胸をドキンと鳴らした次の瞬間、唇に柔らかな物体が押し当てられた。

「んっ！」

人妻の唇は熱く、内側からはほんのりとアルコールの匂いがした。その匂いにくらりと後頭部が眩む。

（な……美沙子さん……どうして……）

自分の身に起きていることが、信じられない思いで薄目を開くと、目の前にはやはり美沙子の顔があった。長い睫がふるふると揺れているのを見ながら、いったい何が

起きているのかと必死に考えていると、美沙子も薄目を開けた。

視線が絡んだ瞬間、真治の唇を割って、美沙子が舌先を差し込んできた。ちゅつと唾が鳴り、火傷しそうに熱い舌べろがにゆるりと真治の唇に擦れる。

とんつと、舌先が前歯を軽くノックした。自然と開いた上下の歯の間から、舌がぬるりと這入りこんできて、真治の舌に絡みついた。

「んっ……ちゅっ……んんっ」

美沙子は真治の舌を自分の舌で捉えようと、その表面を擦り付けるようにねつとりと動かしてくる。口内へと流れ込んでくる唾液が媚薬のように真治の頭を蕩かせて思考を停止させていく。

乳房の上の右手のひらに力を込めて優しく揉み込むと、美沙子はんつと鼻を鳴らし、さらに舌を激しく絡めてくる。その情熱的な舌の動きに、下腹部にどくどくと血が集まってあつという間に硬くなってしまった。

「……こういうこと、ずつとしてないの、わたし」

唇をわずかに離すと、美沙子が真治の顔色を窺うような上目遣いの視線を向けて言った。

「こういうことって？」

「こういうこと。キスをしたり……身体を触られたり……ね、だから、今、すごくドキドキしてる」

「ぼ、僕もですけど……」

なんといつてもわずか数十センチの場所に、初体験の相手が眠っているのだ。ドキドキしないわけがない。

が、その一方で、目の前の人妻に強力な魅力を感じてもいた。

綺麗にブローされたショートヘア。金色のピアスの光る小さな耳たぶ。そして毛穴のひとつも見つからないしつとりとキメ細かな肌に、何かを憂えたような瞳。

真治の身体を抱え込んだその身体からは、花のような馨しい香りが立ち昇ってきている。大人というに相応しい、熟成した色香に満ちたその姿に抗うことができずにいると、美沙子は恥ずかしそうに顔を伏せて下唇をきゅつと噛んだ。

「あのね、わたしのこと、女としてみれる？」

「も、もちろんですよ」

「本当かしら……」

「う、嘘なんかつきませんっ！」

いったいどうしたというのだろう。

いつもとなんだか違う雰囲気的美沙子に戸惑いながらも、手のひらは乳房に吸い付けられたかのように、手放すことができない。

「ねえ……だったら証拠を見せて」

「えっ、証拠って……」

最後まで言い終わらないうちに、美沙子は真治の股間に指先を伸ばしてすつと撫で擦った。

「あっ！」

驚きに身体をびくと震わせながらも、かあつと顔に血が登っていくのがわかった。
(うっ、おちんちんが勃ってるのがバレちゃった……)

こういうふうには抱きしめられて、胸を触らされてキスマでされてしまっただけで、致し方ないことではあるが、それでも恥ずかしくて後頭部がズキズキと痛んだ。

「あ……本当だわ。嬉しい」

しかし美沙子は、先ほどまでの憂いが掻き消えたように微笑むと、硬くなった股間を指先で辿った。

「う、嬉しいって……あの………いっただい……」

「わたしで、こういうふうにしてくれて嬉しいの。ね、お願い、もっと触らせて」

美沙子はソファの上から身体をずらすと、そのまま床に膝をついた。

跪いた体勢で、真治のズボンに手を掛けるとゆっくりとチャックを降ろしていった。「ちよっ、あの……美沙子さん、いったいどういう……」

真治の制止も聞かず、美沙子はボクサーブリーフを下ろすと、遮りを失くした屹立がぴよこんと勢いよく飛び出した。すっかり血が流れ込んで、天を突くように上を向いた勃起ペニスだ。

「こういうのを見るのも……久しぶり」

美沙子は潤んだ瞳を屹立に向けると、ちらりと視線を上げて、自らを恥じるように、真治の顔を窺った。興奮か照れかはわからないが、ほんのりと頬の辺りが赤く染まっ
ていて、それが妙に色っぽい。

「あの……久しぶりって……」

「こういうの見るのが……あのね、うちの旦那、EDなの」

「えっ！ EDってその……ちんちんが……」

「そう、勃たないのよ。それでずつと夫婦生活もご無沙汰で」

「そ、そうですか……それは……それは大変ですね」

こんな美人妻を前にして、ちんちんが勃たないだなんて、どうしたことだろう。も

しも自分がそういう身体になったら、と想像するとなんだか空恐ろしい気持ちに襲われた。

「そうなの。大変っていうか……ね。ここが勃たないと、女に触れるのも嫌になるもの？」

「いや、僕は勃たないっていうのがよくわからないんで、それはなんとも……すみません……。あの、勃たないだけじゃなくって、その……触ってもくれないんですか？」

「そう。キスだってたぶん、今年に入って初めてかもしれないし、ここにこうやって触るのは……前がいつだったかなんて、もう覚えてないわ」

美沙子はほっそりとした指先を、真治の陰茎に巻きつけると、すつと撫でるように下へとずらした。すると、痺れるような快感が性道に奔り腰が浮いた。

「あっ……」

「真治くんのおちんちん、熱いのね。手の中でドクドク言ってる……」

その鼓動を確かめるかのように、美沙子は筒にした手のひらを陰茎にぴったりと張り付けると、ピアノを引くようなタッチでやわやわと指先を動かした。その指先の微妙なタッチにゾクゾクとした興奮が下腹部に溜まってくる。

「あの……美沙子さん、そんなところ……あ……あっ……」

「真治くんのおちんちん、敏感なのね。ほら、もうこんなに濡れてきた。見て」

美沙子に言われて下腹部に目を落とすと、亀頭の先端の小穴からこぷりと透明の液が噴き上がり、丸い玉を作っていた。

「いや……その……あああ……」

まるで先端に液を誘導するように、上へ上へと絞るようにシゴき上げる美沙子の指先の感触が、性感神経を通じて腰奥までジンジンと響いてくる。快感に耐えながらも、奈央にちらりと視線を送ると、美沙子は自分だけを見ろとばかりに、上半身に着けているカットソーの裾を胸上までめくり上げてその見事な双胸を晒す。

（うわあっ！ こんな……こんな下着を身に着けてるんだ……）

美沙子が身に着けていたのは濃い紫色のブラジャーだった。

つるんとしたシルク地のカップの上に、同じトーンの紫色と金糸とで繊細に編まれた花柄のレースが重ねられていて、いかにも高級そうだ。

ともすれば、下品に陥つてしまいかねないドギツイ色にもかかわらず、それを身に着けている肌の質感がまるで陶器のように滑らかで美しいせいも、むしろ高貴ささえも漂っている。

もちろん、ブラジャーだけではなくその下の膨らみも極上の一言に尽きた。青い血

管が微かに浮き出すほどに白い肌、釣鐘型の膨らみは豊かで、深い谷間の溪に向かい、首に巻かれた細い金のチェーンがさらりと流れている。

高級なブランド品のように美しくラッピングされた膨らみに手を伸ばすと、その指先に力を込めた。芸術品に触れているような気分で爪先でレースを辿ると、触れた部分があふふにとへこんで乳房が波打つ。

乳房が自分の指先を受けて形を変えるのが愉しく、思いきって手のひらで驚掴みになると、ぐつと五指に力を入れた。柔らかな乳房が、ぐつと押し出されるようにブラジャーのカップからはみ出す。

「すごい……おっぱい柔らかい……」

今までに触れた中で一番柔らかい、まるで水のようなバストだった。

わずかに力を加えるだけで、自由自在に形を変えていく。手のひらにしなだれかかるとような重感も心地よく、揉み込んでいるとうつとりとした興奮が胸の中に満ちてくる。乳頭は、そのポリウムたつぷりのバストによって伸ばされてしまったかのよう色に薄く、淡い桜色の膨らみの真ん中にぷちりと小さな乳頭の突起があった。

「ああ、嬉しい。そうやって触ってもらって」

美沙子は眉根をきゅつと寄せて切なげに喉元を震わせると、顔を真治の屹立に寄せ

た。

すると、ふっと熱い息が肉竿に吹きかかり、ぶるりと全身が震えた。

「ああっ……」

唾えられてしまう……自然と背筋がピンと伸び、襲い来る快感に耐えようと試みる。が、美沙子は屹立をくつと持ち上げると、いきなりその下の睾丸に舌を押し当てた。

「ひゃうっ！」

予想もしていなかった部位に、ぬめった舌の感触を覚えて腰が跳ね上がった。快感でお尻の穴がきゅつと縮み、こそばゆさ混じりの愉悦が股座を痺れさせる。

「んんっ……んちゅ……ぶちゅっ……」

美沙子は睾丸を口の中へと咥えこむと、鉛玉を擲るように舌先でくすぐった。温かな沼地に浸され、陰囊にふつつつと愉悦が奔る。

「ああ……ああああっ……ひゃうああっ……」

腰が浮くような快感に思わず声を漏らすと、美沙子はちらりと上目遣いで真治の表情を窺い、目をふつと細めて優しい微笑みを浮かべ、屹立を掴んでいた手をすつと亀頭に向かってスライドさせた。

「あふあつ、ううっ……！」

指先の動きに釣られたかのように、またも先端から透明の汁が溢れ出した。美沙子はそれを指先で掬い取ると、亀頭の裏筋部分に塗り付け、筒にした手の指先で、軽いタッチでくすぐった。

性感神経の一番集中したカリ首の裏筋を、刺激されぐぐつと睾丸が迫り上がり、肉竿にどくんと血が流れ込んだ。その血流をさらに促そうとするかのように、美沙子は口からゆつくりと睾丸を吐き出し、そのまま屹立の根本へと移動する。

「んっ、こんなふうに大きくなつたおちんちんを口に入れるの、久しぶりだから、上手くできるかしら」

美沙子はひとり言のように小声で漏らすと、べろりと根本までピンク色の舌をはみ出させた。その舌べろの中央部分を、横から裏筋にべつとりと押し付けると、舌先を巻き込むように陰茎に吸着させた。

「うっ……ああっ、美沙子さんの舌、温かい……」

美沙子の舌で根本が包み込まれて、その愉悅に溜息を漏らしたのもつかの間、柔らかくかいて、ぬるぬるとぬめつた舌先が、くちゆくちゆといやらしい音を立てて、ゆつくりと亀頭に向かって移動してくる。

ややざらついた味蕾が裏筋を擦り上げる快感が、その奥の精道まで響いて精液が沸

き立つ。遅しく突き立った陰茎を舐める美沙子の顔を見下ろしつつ、乳房に置いた手を弄ると、ブラジャーのカップの中に指先を差し込んで乳首を探る。

「んっ……あああっ……」

すぐにぼちりと突き立った突起を見つけ出すと、人差し指と中指との間に挟み、きゅつと左右から締め付けると、美沙子が唇の端から悩ましい声を漏らした。

さらに感じさせるべく、バストを下から掬い上げている手をぐにぐにと動かして乳房を解していると、だんだんと汗が滲み、手のひらにびったりと張り付いてくるようだった。

「ああっ……あああっ……もつと……もつと強く。ねえ……あああっ」

久しぶりの男に身体を触られることがよほどに嬉しいのか、美沙子は恥ずかしげに真治の顔を窺いながらも、おずおずと愛撫をねだってきた。

真治の気を盛り上げようとでもするように、舌の動きが激しくなり、ぶちゅぶちゅという淫らな水音が響くとともに、甘い唾液の匂いが立ち昇ってくる。

「ああ、美沙子さん。僕、気持ちいいです……ものすごい気持ちいいっ」

「嬉しいわ。ああ、すごい、どんどん硬くなっていく。すごいわ、真治くんっ！」

美沙子はちゅつちゅつとくちづけでもするかのように強直に唇を押し付けると、ぼ

こりと浮き立つた血管に舌を這わせる。

人妻の貪欲ともいえる舌技に声を漏らすと、美沙子もまた、感激の嬌声を上げた。まだ、口の中には入れてもらってもおらず、表皮を舌で舐め上げられているだけで、これだけ気持ちいいのだ。唾えてもらったらどれだけの快感なのか。

初めて見た時はビックリしたほどに美しい年上の女性と、こんなことになっているんだなんて、まるで夢のようだ——夢？

(あっ！)

正面のソファで夢の中にいる叔母の存在を思い出し、慌ててその様子を確認すると、奈央は「んんっ」と寝苦しそうに声を漏らして身体を反転させた。

すると、ちょうど顔がこちらを向く形になりドキンと心臓が高鳴った。

(お、起きたらどうしよう……申し開きが……つかない……)

しかし、あさましいかもしれないが、ここで中断するのもそれはそれでつらい。

もうすつかり身体は昂って、期待にペニスはピクピクと震えている。それに、美沙子にしても、ここまでできて拒絶したら傷つくのではないだろうか。

(ううっ、どうしたらいいんだ……)

せめてイクまで目を醒まさないでいてくれたらいいのだが、果たしてそんなに長い

間寝ていてくれるものだろうか。

せっかくならゆつくりと美沙子と睦みたい気持ちもあったが、あまり悠長にはして
いられないことに気が付いて、美沙子の後頭部に手を置いた。

「あの……美沙子さん、口の中に……」

「あら、うふふ。ぺろぺろされてるだけじゃ、我慢できないのね。いいわ。お口の中
に入れてあげる」

美沙子は真治から求められるのがさも嬉しい様子で、ジグザグと先端まで、陰茎に
唇を這わせていった。すでにカウパー液でドロドロになった鈴口にちゅつとくちゅけ
ると、ゆつくりと唇でシゴくようにペニスを飲み込んでいく。

「ああ……ああああつ……」

アルコールのせいかな、はたまた欲情してか、美沙子の口の中は火傷するほどに熱く、
そしてぐつしよりと濡れていた。

口内に含まれた部分、内頬の粘膜が屹立に張り付いてみっちりとは両脇から締め付け
てくる。その濡れた粘膜に射精欲を煽られて思わず美沙子の頭を押さえている手に力
が入った。

「んっ、んぐっ」

ぐっと押さえ込んだはずみで、喉奥にペニスが刺さり、美沙子が苦しそうに噎せた。申し訳ないことをしてしまったと慌てて手の力を緩めると、美沙子は自分の頭上に置かれた真治の甲の上に自分の手を乗せてぐっと力を入れた。

「あっ！」

つるんとした喉粘膜が亀頭にぶつかり、どぷりと生暖かい液体が降りかかる。その液体は、ただの唾よりも粘度が高く、そのせいでよりつるつると粘膜が滑って漏らしてしまいそうな快感だった。

「ううっ……」

呻き声を上げると、美沙子はペニスを頬張りながら上目遣いにとろんとした視線を向けた。真治に喉奥を犯され、やや被虐的な悦びを感じているかのようだ。

ぢゅぶっ、ぢゅぶっ、という凄みを増した水音とともに、美沙子の唇の端からどろりと白く泡立った粘液が零れ落ちる。上品な造りの顔を唾でドロドロに汚しながら一心不乱に肉棒を舐めるその姿に、普段とのギャップと相俟って、昂奮がますます昂っていく。

「はぁあ……お口の中が真治くんのおちんちんでいっぱい……」

蕩けそうな表情で美沙子が漏らしたその時、視界の隅で何かが動いた。奈央だ。

「んっ……んっ……」

奈央が目の辺りを手で擦りながらゆっくりと身体を起こした。

(やっ、やばっ)

慌てて美沙子の身体を引き剥がそうとしたが、しかし、真治の股座に夢中で顔を埋めているため、背後の奈央が目を覚ましたことにはまるで気が付いておらず、ひたすらにじゅぼじゅぼと口淫を続けている。

奈央は身体を起こしきると、真治たちに気が付き、目をパチクリさせた。

(う、うわっ、奈央ちゃんに気づかれたっ！)

申し開きのつきようのない状況に軽いパニックを起こす真治をよそに、美沙子は肉竿を齧る口を止めようともしない。そんな二人に視線を送りながら、奈央は驚いたようにぼっかりと口を開けている。

(お、怒られる……?)

奈央と初体験を済ませたのもこの同じソファだった。

奈央はこの店のオーナーでもある。だから誰も文句のつけようはないが、しかし、美沙子と真治は違う。奈央が必死の思いでオープンさせた店で、イチヤイチャどころではなく睦み合っているのだから、クビを言い渡されても文句を言えた筋合いはない。

「な、奈央ちゃん、ごめん、ごめんなさいっ！ み、美沙子さんダメだよっ」
「えっ!？」

ようやくのこと、奈央が目を覚ましたことに気が付いた美沙子が、真治のペニスを口から抜くと、唇の端に零れた涎を手の甲で拭いながら振り返り、気まずそうな笑みを奈央に向かって浮かべた。

（ううっ……どうなるんだろう……）

なんでこんなことになってしまったのか。よくよく考えてみれば予測できた展開だが、酔って判断力がなくなっていたとしか言いようがない。

しかし、奈央は美沙子と真治とを交互に見遣ると、肩をすくめて笑った。

「……やだ、人が寝てるのをいいことに。なんなのこれ、もうっ」

「いや……その……」

「言い訳はいらないよ、真ちゃん」

真治の言葉をぴしゃりと遮ると、奈央は立ち上がった。テーブルを回り込み、真治の左隣に腰を降ろすと、すっかり萎びてしまったペニスを左手で掴んだ。

「えっ!？」

何が起きているのか理解できないまま、あっけにとられていると、奈央はもう片方

の手を真治の肩の上に乗せ、身体をきゅつと寄せて耳たぶを甘噛みした。

「途中で止めちゃったら、ツライよね。だから、三人で続きをしよう」

「ええっ、三人でっつて」

「ね、美沙子さん。いいわよね」

奈央は、挑戦的ともいえる視線を美沙子に投げると、真治の耳穴に舌を差し込んで穿った。

「ひゃ、あああっ！」

こそばゆい快感が首筋を走り、反動で肩がびくんと上がった。そんな真治の反応に、奈央は満足そうな笑みを浮かべながら、項垂れたままのペニスを持ち上げてゆつくりと手をスライドさせる。

「ね、美沙子さんのフェラチオ、気持ちよかったの？ わたしにされるのと、どっちが気持ちよかった？」

「え……あつ……」

応えに困っていると、また別の手がペニスに絡みついてくる気配を感じた。美沙子の手だ。

「なーんだ、真治くんっつてば、オーナーともそういう関係だったんだ。可愛い顔して

なかなかなのね」

美沙子は奈央の手の上から陰茎を握りしめ、空いている左手の指先で、鈴口をくるくると撫でた。潤滑油代わりの喉粘液が指先を滑らせて、じんと尿道が痺れる。

「美沙子さんだつて意外だわ。浮気なんてしない貞淑な妻ですつて顔をして、年下の男の子に手を出すだなんて」

「いろいろあるのよ……ね、奈央さんにだつていろいろあるんでしょ？ わかるわ、わたしも同じ女だもの」

美沙子は肉竿の上の指先をぐねぐねと動かすと、やはり屹立を掴んでいる奈央の指の間に差し込んで組んだ。がっちりとは繋がれた二人の手が陰茎の三百六十度を包み込み、みっちりとは締め付けてくる。

「あつ……すごい……き、気持ちいいつ……」

小さくて可愛らしい叔母の手と、すらりと白魚のような人妻の手、そのふたつに下半身の滾りを握られ驚きとともに、なんとも言えない歓びが身体中に満ちてきた。

こんなふうに一時に二人の女性に、淫竿を触ってもらえるだなんて、そんなことがあつていいのだろうか。

「真ちゃん、気持ちいいの？」

思わず声を漏らすと、奈央が囁いた。すると熱い吐息が涎で濡れた耳穴をくすぐり、
またも背筋がぞくりと震える。

「う、うん……なんか二人に触られるだなんて……変な気持ちで……」

「そっか……しようがないなあ……真ちゃんって、そんな変態だったんだ」

奈央は真治の顔を覗き込むと、じつと視線を合わせてきた。

幼い頃から、真治のことをよく知っている大好きな叔母に、自分のあさましさがさらけ出されてしまったことが恥ずかしく、それでいて後ろ暗い快感を覚えているのも事実だった。

（な、何をされるんだろう……）

ゾクゾクと武者震いしていると、美沙子が嫣然とした笑みを浮かべ、尿道の先端を摘んできゅつと絞った。すると押し出されるようにしてとろりとした先走りが染み出してくる。

「ね、そんな変態な真治くんのおちんちん、どうしちやおうかな。ね、どうして欲しいの？」

「あつ、えつと……その……」

「さつきみたいに、またお口でして欲しい？」

「は……はい……」

「そっかあ。真治くん、淫乱だね」

目に妖しい光を宿した美沙子は、半開きの唇を真治の亀頭の先端にくちづけると、ちろりと舌をはみ出させて、ペロペロとカウパー液を舐めとり始めた。

「ううっ！」

「真ちゃんつてば、美沙子さんに舐められて、そんな声出しちゃって。もうっ、悔しいなあっ」

鈴口に甘い痺れが奔って身体を震わせると、奈央が苛立ちを表すかのように目をきゅっと細め、真治の顎を掴むと唇を奪った。

「んんっ……」

少し乱暴に押し付けられた唇が、はむはむっと真治の唇を啄んだ。吸い付いては、すぐに離れてしまうのがもどかしくて、思わず奈央の右の二の腕をぎゅっと掴むと、奈央は真治の顎を掴んで上を向かせた。

「どうしたの？ もっとわたしのこと、欲しいの？」

こくこくと頷くと奈央の目の険がふっと緩まった。いつも通りの優しげな笑みを浮かべると、真治の唇にむちゅっと唇を重ねてくる。

「んっ……んちゅっ……むちゅっ」

軽く開いた口から、漏れる吐息が一人の唇に湿り気をもたらし、密着させていく。ぴったりと隙間なく重なった唇の間から、舌を差し出して叔母の口中へと忍び込ませると、とろりとアルコールじみた唾液の味が感じられた。

「真治くん、可愛い。オーナーにキスされたら、おちんちんがまた硬くなっちゃったわ」

美沙子は笑いを含んだ声で言うと、敏感な少年の変化をいつくしむかのように、鈴口にちゅっとかちゅつした。そのまま、口の中へとゆつくりと埋めると、亀頭を飲み込んで、クビレの部分を唇で締め付ける。

「うっ……うううっ……」

二人の女性に上半身と下半身の、それぞれの粘膜地帯を、唇と舌でまさぐられ、劣情が身体中をぐるぐると駆け巡る。昂奮に突き動かされるまま、奈央の胸の膨らみにシャツの上から触れると両手で驚掴んで揉み上げた。

「あぁっ……んっ……」

真治の手に敏感に反応する奈央の胸を弄ると手探りでボタンを外した。上から二つ目、三つ目は上手く外すことができたが、気が急いでいたせいか力を入れすぎてしま

い、上から四つ目のボタンがぷちんと弾け飛ぶ。

「ああっ……」

第四ボタンまで外されると、はだけたシャツの隙間から、薄いブルーのブラジャーと腹部の肌が見えた。衝動に駆られるまま手を差し込むと、シャツが落ちて両肩が出る。

「奈央ちゃん……」

我慢できずにブラジャーの肩紐をずらしてカップを落とすと、ふくよかなふたつの膨らみがぼよんと弾んで零れ出た。その間に顔を埋めると、柔らかな弾力でもって受け止められた。

「ああん……もうっ。甘えんぼなんだからあ」

奈央が甘い声を上げると、美沙子とともに屹立を掴んでいる手にきゅつと力を入れた。押し上げられるようにして精液が屹立を遡り、亀頭を一層膨らませる。

「あつ、また大きくなった……すごいわ。若いおちんちんってこんなにすごいのね」
美沙子がカリの段回りに沿って舌をぐるりと這わせた。その巧みな舌遣いに腰がガクガクと震える。

すぐにでも連れ去られてしまいそうな快感に耐えようとしてか、無意識に奈央の乳

頭を唇で探ると、ぱくつと口の中へと咥えこんだ。するとほのかに甘いミルクのような味が口の中に広がりうっとりとした恍惚に囚われる。

子供がいないのだから、母乳など出なくて当たり前だ。しかし、叔母のふくよかな膨らみは、母性に溢れていて、ちゅつと吸い上げればミルクが出てきそうな錯覚を覚えた。

妄執だと頭ではわかっていながらも、ちゅうちゅうと吸い込むと、たちまち乳頭が尖って口の中で堅くなった。

「ああっ、そんなにいっぱい吸われたら……はあああっ……気持ちい……」

より吸いやすさを増した勃起乳首を舐め吸っていると、奈央が我慢できないとばかりに腰をくねらせてきゅつと屹立を掴む手に力を込めた。美沙子も負けじとばかりに奈央の手を握り返し、剛直が両脇からぎゅうぎゅうと締め付けられる。

真治と美沙子の、それぞれの唇から漏れるぴちゃぴちゃという水音が淫らに合奏し、そこに三人それぞれの吐息が重なる。いったいこれからどうなっていくのだろうか、と想像するだけで気持ちちが昂り、叔母の乳頭を嚙る舌遣いが自然と激しくなっていく。

「あああっ……ダメ……もう……これ以上は……あああっ」

下から左右に振動させるようにしてレロレロと舐め上げていると、奈央が喉をぐつ

と反らせた。

「あああつ、だめ、真ちゃん、それ……はあああつ……あああつ」

いやいやと真つ赤に染めた顔を横に振る奈央の、真治の肩の上に置かれた手にぎゅつと力が入った次の瞬間、小さく身体を震わせると、真治の両頬を包み込んでいる乳房が瞬間的にかあつと熱くなった。

「あ……あああつ……あああ……」

乳房の内側から、どくどくと激しい鼓動が響き、ぱつと噴き出してきた汗が真治の頬を濡らした。

（えっ、ひよつとして、イ、イっちゃった？）

嬉しい驚きを持っていると、奈央はその場に崩れ落ち、美沙子はその身体を受け止める。

「やだ、オーナーってば、すつごく敏感なのね」

「……普段はこんなこと……ないんだけど……どうしちゃったんだろう、わたし」

美沙子の胸の中で、奈央は今さら我に返ったのか、顔を真つ赤に染めると少し泣きそうな顔を真治に向けた。

「でも、嬉しいよ、奈央ちゃんっ！ そんな……乳首だけでイってくれるだなんて」

「もうっ。言わないで、真ちゃん。恥ずかしいんだからっ！」

「いいじゃないの。恥ずかしがることじゃないわ」

「でもっ……」

まるでトマトのように顔を真っ赤にしている奈央の様子は、いつもに増して可愛らしい。七つも年上の女性に向かって言うことではないかもしれないが、ぎゅっと抱きしめたくなるキュートさを持つていた。しかし、一方で気を遣って潤んだ目元は、艶っぽく胸はざわざわと騒ぐばかりだ。

「ね、それよりも真治くん。こんなにパンパンなの、ね、ツライでしょ」

「あ……うん……はい……」

「じゃあ……」

今にも爆発しそうな具合に腫れ上がってしまっている屹立に、美沙子は舌を伸ばすと、根本からジグザクと昇らせていった。先端まで辿り着くと、卑猥な笑みを浮かべ、真治と奈央とに順番に挑発的な視線を投げながら、ゆっくりと口の中へと飲み込んでいく。

「ねえ、真治くん、気持ちいい？」

「はっ、はい……」

口の中にペニスを差し込んだまま、やや不明瞭な発音で美沙子が問いかけた。その口内粘膜の熱くじゅるじゅるとした粘液に、さつきから焦らされまくっている剛直が疼きを上げる。

「……ずるいイ……わたしだつて」

奈央もまた、美沙子の身体を押しつけてずらすと、真治のペニスの根本に舌を這わせてきた。チロチロと小皿のミルクを舐める子猫のような舌遣いが、腰奥がぎゅわんと快感を呼び起こす。

「あぁっ……ふ、二人でなんて……ううっ……」

上品な唇を唾でドロドロにし、淫蕩に蕩けそうな表情で真治の剛直を啜り上げる美沙子、黒く縮れた陰毛に鼻先を埋めて、健気な顔つきで舌を這わせる奈央。

二枚の舌、ふたつの唇から生み出される愉悅の強烈さに加え、そのビジュアルの凄まじさにますます淫猥な気持ちりが沸騰する。

高まっていくばかりの射精欲を必死に抑え込み、二人のバストに手を伸ばすと左右の手でそれぞれ握りしめる。

(あぁあぁっ、柔らかい……)

右手にあるのは美沙子の熟した豊乳だった。

重さでずっしりとしなだれかかりつつも、乳首はピンと上を向いて突き立った釣鐘型で、触るとしっとりキメ細かな肉が手のひらに吸い付いてくるようだ。

心許ないほどにフニフニとしたその質感は、まるでつきたてのお餅のようでも何でも触っていたいほど心地いい。先端の乳頭は、充血してわずかに赤みを増したものの、それでもまだ桜貝ほどの淡い色味だ。

対して左手の内にある奈央のバストは、美沙子に比べると張りがあり、ブラジャーをずらしても、見事なお椀型を保って前に突き出していた。弾力も豊かで、指先で揉み込むと程よく跳ね返してくるのが愉しく、ついつい夢中になって揉み込んでしまう。両手で二人の女性の乳房を抱えつつ、ペニスはその二人の口で愛されているだなんて、破廉恥すぎる行為に頭がクラクラしながらも、激情は加速していくばかりだ。

美沙子は、亀頭を唇から引き抜くと、亀頭の側面に沿い、根本へと向かって舌を降ろしていった。反対に奈央は、美沙子の唾液ででろりと淫猥な光沢を放っている先端に向かい、舌を這い上げていく。すると、ちょうどペニスの中間部分で美沙子と奈央の舌が交差した。美沙子は悪戯っぽく笑って、真治の陰茎上で、奈央の舌に自分の舌を絡めた。

「んっ……」

驚いたように目を見開く奈央に美沙子はアイコンタクトを送ると、三角形の張り出しの右半分を舐め始めた。戸惑った様子を浮かべつつ奈央がその反対側に舌を当てる時、シンメトリーな快感にペニスがびくびくと脈打つ。

「あああつ……ああつ……」

二人が舌先をそれぞれ動かすと、屹立の各所で抗い難い快感が起こり、腰がブルブルと震えてしまう。いつそ出してしまいたい欲望に駆られるが、しかし、この先にはさらなる快感の本番が待っているのだ。

（二人の……中でイキたい……）

美沙子と奈央の口淫を振りきり、その場に立ち上がる。

「……もう、ダメだ……お願い、入れさせてっ」

衝動に駆られるまま、二人を立ち上がらせると、二人は互いに目を合わせるようにして一瞬微笑んだ。そして、それぞれ、妙に真治の視線を意識をしたように腰をくねらせて下半身に着けていた衣服を取り払うと、下着も脱いだ。

「いいわよ、真治くん」

「真ちゃんきて」

二人がソファのシートと背もたれに手をつく形でバックスタイルを取ると、艶めか

しい曲線を作った背骨の先、細く括れたウエストから、ぐいっと突き上げた真ん丸の尻がふたつ並ぶ、凄まじい絶景が広がった。

「う、うん。入れるよ……」

どちらに入れるか一瞬迷った。すると、美沙子がすかさず、前から手を回して自分の裂割をぱっくりと開いた。

指の間からサーモンピンク色の濡れ肉がさらけ出された。ぬらりと光るその淫らかな媚膜に反射的に美沙子の腰を掴みかけたが、寸前で思いとどまった。

どっちとしたいのか。そりゃあ、もちろん両方としたい。けれど、好きなのは奈央のほうではないのか。

(そうだ、僕が一番大切なのは、奈央ちゃんなんだ……)

ここにきて、ようやく自分の気持ちを確認し、奈央のクビレを掴んで引き寄せると、奈央が顔だけで振り返り、真治にはにかんだ笑みを投げかけた。やつぱり奈央で正しかった。そう確信すると、淫裂にペニスをねじ込んだ。

触つてもいらないというのに、奈央は奈央なりにこの状況に興奮していたのか肉割はすでに十分に潤いを持っていた。ゆっくりと後ろから差し込んで奥まで入りきると、ふーっと愉悦の溜息が漏れた。

奈央の中は相変わらず温かかった。真治のペニスが奥まで到達すると、その形に馴染むように膣肉が収縮して、包み込むようにみっちりと密着する。

粒だった膣道が陰茎を締め付け、こりこりとした子宮口に亀頭を優しく押し返されると、性感曲線のカーブがきゅうつと上昇してすぐにでも果ててしまいそうな快感に襲われた。

「もうっ、やっぱり最初はオーナーなんだあ……」

もももどと変化する奈央の膣内を味わっていると、美沙子が振り返り、真治を軽く睨んだ。その視線の色つばさにゾクつと背筋を震わせていると、腰を婀娜あだつぽくくねらせて真治の後ろに回り込み、シャツのボタンに手を伸ばして上からひとつずつ、プチンプチンと外していく。

「んんっ！」

すべてのボタンを外し終わると、美沙子はシャツを真治の身体から剥ぎ取って、自分も胸の上までめくっていたカットソーとブラジャーを剥ぎ取った。

「まあ、仕方がないか。でも、わたしにも入れてくれるわよね」

すっかり一糸纏わぬ姿になると、美沙子は真治の背中にぴとりと身体をつけた。温かな肌の温もりとともに、柔らかなおっぱいが背中に押し付けられてぽわんとバウン

ドした。

「あ……はいっ……」

「うふふ。期待してるわよ」

美沙子は妖しげな色を湛えた瞳で微笑むと、背伸びして真治にくちづけを求めてきた。応じて唇を寄せると、ねっとりとした舌べろが口内を弄り始めた。

（ううっ……ああああっ……すごいエッチだよ、こんなの……）

奈央とこうやって立つたまま繋がるのは初めてだった。それだけでも新鮮だというのに、美沙子という刺激的な存在が、さらに背徳感を掻き立てる。

ほっそりとクビレた奈央の腰を両手で掴み、しっとりとしつとりと馴染みきった屹立をゆつくりと抜くと、愛液がちゅぷちゅぷと鳴った。亀頭のクビレまで露出したところで、今度はやや勢いよく打ち込むと、引き抜く時にこちら側を向いた膣内の細かな襞に、太棹が擦り付けられて強烈な快感が脳天を突き抜けた。

「あああっ……あああっ」

その激しい愉悅に理性が飛んだ。

奈央の腰を指先がめり込むほどに強く掴むと、屹立を押し込む。出し入れする度に膣口からじゅぶじゅぶと漏れる愛液は、攪拌されて白く泡立ち、じゅぼじゅぼと溢れ

出して二人の接合部を濡らしていく。

「もうっ、ねえ、そろそろわたしのにもお……ちよつとだけでいいから……」

美沙子は唇を離すと熱量の増した声色で囁き、自らも再びソファに手をつけて四つん這いになった。もう少しだけ奈央と繋がっていた気持ちもあつたが、再び、ぱっくりと割れたサーモンピンクの媚肉を見せつけられると、こちらにも入れてみたいと牡の本能が疼いた。

「あああつ」

自分のものとは思えぬような獣じみた喘ぎ声を上げながら、奈央の膣からペニスを引き抜くと、今度は美沙子のクレバスへと押し付ける。

「んっ……んんっ……あああつ……入ってくるう……あああつ、久しぶり……」

歓喜の声を上げながら美沙子が一層高く腰を突き上げると膣肉をめりめりと掻き開き、亀頭がとんと子宮へとぶつかつた。根本までぎっしりと締め付けられる至福の感触に、腰が勝手にガクガクと突き上がりぎゅっつと精液が迫り上がる。

奈央から抜いた直後のために、より一層、二人の女陰の違いがわかつた。

よく濡れていて、じわじわと吸い付くような奈央の蜜壺に比べて、美沙子の牝穴の肉はずつと解れていて、それでいて膣道自体が狭い。柔らかな肉道を押しのけてぐっ

ぐつと侵入していくのが甘美だった。

美沙子に屹立を抜き差しする度にたちまち膣道が収縮し、またも差し込む時に、狭穴をこじ開ける快感が何度でも愉悅を生む。

どちらも優劣などつけようがない至高の感触で、片方に入れていると、途端にもう片方の牝壺が恋しくなってきたりしてしまうほどだった。

「あああつ、いいつ。はあああつ。真治くんつ、気持ちいいつ」

後ろから前へと手を伸ばし、美沙子の淫豆をきゅつと揉み潰すと美沙子がビクンと身体を震わせた。その隙にペニスを抜き取ると、今度は奈央の猥裂へとぐぐぐと差し込む。

「ああつ、真ちゃんのおちんちんが……またつ……」

奈央は身体をぶるぶると震わせて真治のペニスを迎え入れると、もう放したくないとばかりにぎゅつと締め付けてきた。

（うつ、す、すごい締め付けだ）

うっかり引き抜いたら、その膣圧でイってしまいかねない収縮だった。

しかし、そのまま差しっぱなしにしておくには、欲情が滾りすぎていく。劣情の赴くままにゆつくりと引き抜くと、尻側の膣壁に龟头の先が擦れてますます射精欲が高

まっっていく。

「あああんっ……ひゃああっ……うあああんっ」

気が付けば、美沙子は立ちバツクになった体勢のまま、自分でクリトリスを掻き弄っていた。普段の上品な姿からは想像もつかぬ淫らにも牝じみた行為に、真治の理性が再び飛んだ。

「あああっ、美沙子さんっ！」

炎のように燃え盛る欲情を我慢しきれずに、自らクリトリスをぐちゅぐちゅと弄っている美沙子に再び屹立を押し込むと、腰をぐつと押し付けてぐりぐりと左右に揺らした。すると、一番奥からじゅぼりと愛液が分泌されて真治の亀頭へと降り注ぐ。

愛液に含まれた女性ホルモンがさらに真治の本能を掻き立て、腰の振りが止まらない。壊れた玩具のように滅茶苦茶に抽送を繰り返していると、奈央が欲情にとろんと潤んだ目を真治へと向けた。

「真ちゃん。もうっ、美沙子さんばかりじゃ寂しいよおっ」

「うん、奈央ちゃん、待ってて。今、奈央ちゃんにも……」

「だめっ、だえめええっ、わたし、もう少いでイクから……お願い、抜いちゃいやよっ」



美沙子が首を激しく左右に振ると、綺麗にカットされたショートカットの髪が乱れて頬にかかった。

「奈央ちゃん、ごめん、ちょっと待っててっ」

美沙子の腰をぐっと押さえ込むと、一番奥までペニスを突き立てたまま、腰を上下左右へと小刻みに震わせる。

「あっ、ああああっ、ああああっ。それイ……イイ!!!」

膣口を蹂躪するように亀頭で捏ねていると、ただでさえ狭い膣道がミシミシと締まって四方から締め付けてくる。

「くっ……」

限界寸前まで精液が昇ったペニスは、自分でも驚くほどに硬く、熱くなっているのがわかった。その灼熱した剛直を叩き込む度に、どんどんと美沙子の締め付けが強くなっていく。

（ああっ、だめだ……このままじゃイっちゃう……）

音を上げて絶頂に達しそうになるわずか前だった。美沙子は全身をぶるりと大きく震わせると、上半身をぎゅいんと勢いよく海老反りにした。

「イ、イクッ……あああああっ」

すると、先ほどまでぎゅうぎゅうと締め続けていた膣道がわずかに緩み、代わりに内側へと引き込まれるような蠕動が始まった。

「くっ……くっくうううっ……」

性道に満ちた液体を、なんとか吸いだされないように我慢して、美沙子の牝穴からペニスを引き抜くと、素早く奈央を反対に返して、こちらに前身を向けた。

「あああつ、真ちゃん、戻ってきてくれたんだ」

真治に抱きつく奈央をソファに押し倒すと、両ももを手で押さえ込み、Vの字に股を広げる。

「奈央ちゃん、いくよ」

そのV字の中心部に股間を押し付けると、身体ごとぎゅうつと押し込んだ。

太ももごと、身体全体を抱えたままの体勢で、腰を奥まで沈め終える間もなく唇を奪う。

「あつ、あああつ、ああつ、いいっ」

真治の腕の中で歓喜の声を上げる叔母の唇や頬や鼻先に、滅茶苦茶にくちづけながら腰を引き抜くと、またも深くまで打ち付ける。すると、愛液がびちゃびちゃと撥ねて跳び、気を遣ってすぐ隣に倒れ込んでいる美沙子の身体にまで降りかかる。

「あああつ……奈央ちゃん、奈央ちゃんっ」

「ううっ、真ちゃん、気持ちいい。気持ちいいよおっ。こんな……凄すぎるよおっ」
火傷しそうなほどに熱く火照った奈央の身体は、汗でびしょ濡れだった。ぬるぬると肌を滑り合わせていると、理性の線が焼き切れてひたすらに肉体だけが逸る。

「あああつ、真ちゃん……もう……もういつちやいそうっ」

「いいよ、いつて、奈央ちゃんっ、いつてっ！」

カリ首がはつきりと露わになるほどまで大きく腰を引くと、腰を打ち付ける。限界ぎりぎりのストロークで腰を振ると、ぐっぐつと精液が屹立に溜まりゆき、射精熱は高まっていくばかりだが、しかし一方で、このままずっと抱き合っていたいという気持ちもあった。

（あああつ……もう……ダメだっ！）

一際大きく引いた腰を思いきり、打ち付けたその時、奈央が身体をぎゅうっつと硬くして両足をピンと伸ばした。

「あああつ、イ……イクっ！」

ぶるりと大きく身震いする奈央の股間が凄まじく狭窄して律動する。と、同時に、下腹部で小爆発が起こり、熱い塊が精道を駆け抜けて先端で弾けた。

「あっ！ 僕も……うううっ！！！」

四肢がバラバラになってしまいそうな快感が身体の中心部から先端へと向かって駆け抜ける。感電したかのように全身が甘く痺れる中、力の抜けた下半身からどくどくと精液だけが溢れ出て奈央の中へと流れ込んでいく。

「あああっ」

奈央の太ももの裏に当てた手を外すと、そのまま倒れ込んだ。脱力した真治の身体を奈央はしっかりと受け止めると、頭ごとぎゅつと抱きしめてくれた。

「奈央ちゃん、好きだあ……」

荒らげた息でそう呟くと、奈央の手にぎゅつと力が入った。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>